

巻頭言——解きたい謎——西暦第2千年紀に生きる

Preface: Three Enigmas Wished to Solve in Living of the Second Millennium

千年を見て、今を生きたいと思える。唐津の菜畑遺跡（縄文晩期末）、福岡の板付遺跡（弥生早期）の立地景観を見学してきた。ともに、縄文時代から弥生時代が重層していて、このくに最古の水田遺構を有している。先史時代の人々は海に近く、丘と川のある、とても良い場所に暮らしていたものだ。

私は齢100年に満たない人間にすぎず、植物研究官ETや廃棄物処理機地球型WALL-Eのように千年紀を見て生きることにはできない。しかし、縄文農耕の数千年紀を受け継ぐひと時の駆伝走者にはなれる。だが、現世の人々は先人の生活文化に関心がない（第1謎）。

イネ米だけでなく、すべての作物を正月・小正月の儀礼を尊重して、行事食や健康食として、人々に寄り添ったその長い歴史を受け継ぐのがよい。生物文化多様性を消滅させてはならない。自給農耕は続けるべき生業であり、家族のためにする有機農法は手間がかかり、安全ではあるが沢山はとれない。多品目多品種、在来品種の選抜は飢饉の危険を避ける方法だ。親しい知人には分かち合い、お裾分けはうれしい。

秩父多摩甲斐国立公園周辺の農山村で、40年以上、環境学習・環境保全を目的とした地域振興に関わってきた。農家の人々には歓迎され、とても親しくお付き合いいただいていた。しかし、役場行政や農業関係の団体からほとんど関心を向けられたことはなかった。彼らは、村人でない、関係者でない者の余計なお世話、迷惑と敬遠するのだろうか。名利を求めている変人は猜疑の目で見られるのだろうか。自然文化

誌研究会が10年ほどして環境活動を定着させると、四度も決まって追放の憂き目にあってきた（第2謎）。

地域創成と大風呂敷が舞っているが、小利口な若者は村に誇りを持ってずに都会に出ていき、村に残るのはどうしても先祖伝来の土地を大切にしている老人だけになるのだろう。もう高齢で畑作業がつらく、妻女に言われなければ、働けない。息子は野良仕事をしないで、週末は遊びに行ってしまうと民宿主人は言う。頑丈な電気柵に囲まれた畑さえも耕作放棄されている。

秩父多摩甲斐の地域では、かつて明治前期には薩長閥明治政府への反骨精神もあって、自由民権運動が勢いをもっており、五日市憲法草案も地域住民が独自に検討していた。名利にとられない高い自尊心をもった地域の豪農や豪商が地域住民の窮状を見かねて、自由民権運動をしたが、自由党や困民党なども明治維新政府の苛酷な弾圧で、指導者は獄中でひどい目にあわされ、一家は没落・離散した。

しかし、それ以後、地域住民は彼らを助けず、敬意を表さず、忘却の穴に放り込んだ。この構造がその後100年以上たってもあまり変わらないのは、明治維新政府の功罪の「罪」によるのだろうか（第3謎）。

このくにの人々は孤独に耐えられず、孤立を恐れて思考停止、付和雷同するが、実際には他者を信頼できずに孤立を深めているのだろう。ここから脱却しなければ、地域社会の再生はない。人々は自然や歴史から学び、暖かい情理に添うべきだ。（黍稷農季人 2017.11.20）

